

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十一主日礼拝

「十字架を負って歩む」

ルカによる福音書第23章26節から31節

### 【聖書】

ルカによる福音書 **23:26** 人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。**27** 民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。**28** イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。**29** 人々が、『子を産めない女、産んだことのない胎、乳を飲ませたことのない乳房は幸いだ』と言う日が来る。**30** そのとき、人々は山に向かっては、／『我々の上に崩れ落ちてくれ』と言ひ、／丘に向かっては、／『我々を覆ってくれ』と言ひ始める。**31**『生の木』さえこうされるのなら、『枯れた木』はいったいどうなるのだろうか。」

## 1 十字架の道行

早いものでもう8月です。今年の8月は、特別ですね。オリンピックと新型コロナウイルス感染爆発が一緒にやってきたのですから。その新型コロナウイルス感染が拡大する前まで、私はこの季節は毎年、説教塾の説教セミナーに参加していました。数年前まで夏季説教セミナーは、鎌倉の「イエズ会日本殉教者修道院 黙想の家」という処で開催されていました。その修道院の庭には、主イエスの「十字架の道行」が再現されていました。主が死刑の判決を受けられた場面を第一場面とし、最後は死に葬られた墓の第十四場面で終わるもの。その一つ一つに十字架とローマ数字が掲げられた柱が立っています。この一つ一つの場面を「留」と呼びます。裁判で死刑判決を受けるのが第一留、次は主が十字架を担わされる第二留、墓に葬られる第十四留まで。「留」という言葉を私たち普段は使いませんが、英語で言えば、ステーション、駅、停留所です。そこに一時的に留まる、立ち止まる場所です。黙想の家の十字架の道行は、広い敷地の野山の中に柱が建てられていました。訪れる人は、坂道を登ったり下ったりしながら、一つ一つの柱の前に立ち止まり、主イエスの十字架の歩みを思い起し、黙想し祈りをささげます。しかし、大概のカトリック教会は、礼拝堂の中に十四枚の絵を掲げているようです。やることは同じです。主の十字架の道を描いた十四枚の絵の前に立ち止まり、主のご受難を覚え、祈る。この慣習は、そんなに古いものではなく、15世紀にある修道会から始まり、たちまち広まったようです。私たちはプロテスタント

ですから、そのような絵を掲げたり柱を立てたりはしません。しかし、主イエスの十字架を思い起し祈りをささげ、心を集め黙想し、心に刻む、それは私たちが決して忘れてはならない事、私たちの信仰の要となることだと思います。

さて、皆さんも既に感じているでしょうけれども、主イエスの十字架の道行に十四の場面がある、と聞くと、「どこにいったいそんな沢山の場面があるんだろうか？」と思うでしょう。十四の内には、主イエスが倒れる、という場面があります。一度、二度、三度倒れる。あるいは、既に皆さんも聞いた事があると思いますが、ヴェロニカという女性が登場します。彼女は、主の苦しみに深く同情し、自分の持っていた布で主イエスの血や泥や汗にまみれた顔をぬぐう、すると、その布に主イエスの顔が浮かび上がってきた、という物語です。勿論、主が倒れた、とか、ヴェロニカの布の話は、聖書にはありません。言い伝え、伝説です。しかし、だからと言って馬鹿にはできません。これらの物語を採用し、主イエスの十字架への道を丹念に描き出したのは、主の足跡(あしあと)を心に刻むためであったからです。主イエスが実際に十字架に磔になるまでの道を辿りつつ、その留、その留で、自分たちは、主の同伴者ではなく見物人に過ぎなかった、という痛みをおって思い返し、もう同じ過ちを繰り返したくない、その為に、もう一度、主の十字架の道をたどり直したい、という願いがあったからではないかと思います。

この十四留の主の道行、死刑判決を受けた裁判の場所から、ゴルゴダの地にまで行かれる道筋で起こった出来事でルカが書き留めているのは、たった二つです。一つはキレネ人シモンの物語であり、もう一つは主イエスがエルサレムの女たちに対して警告を發せられた場面です。

## 2 キレネ人シモン

キレネ人シモンとは、どのような人でしょうか。昔から色々と想像されていたようで、様々な伝説がありますが、詳しいことは分かりません。のちに教会の指導者になったと伝えられています。それは兎も角、主の十字架の重さを知った唯一の人でした。名実ともに、主と十字架の道行を共にした人として、シモンという名前は永遠に記憶されるでしょう。

多くの神学者が、「ルカは、このキレネ人シモンに、本来あるべき弟子の姿、つまり、本来の自分たちの姿を見ようとしているのではないか」と言います。私もその通りだと思います。キレネ人シモンに、私たち主の弟子の原点があり、私たちは、そのシモンからやり直す事が必要なのだ、と思わされます。実際、エルサレムでは、重い木の十字架を背負い、引きずるようにしてゴルゴダの丘まで歩く巡礼者もいるようです。

私たちにはそういう慣習はありません。しかし、キレネ人シモンのように主の十字架の道をたどり直す事は、私たちにとっても重要な事だ、と思います。そして、それは、エルサレムに行かなくても出来る事です。今、今日、出来ること。教会は、そのような意味で、キレネ人シモンの後を追って行く群れと言えるのではないのでしょうか。だから、「私達の日常生活において、教会生活において主と十字架の道行を共にするという事はどういう事なのか、何を意味するのか」という問いは、実に具体的であり、私達一人一人が、自分にふさわしいやり方を問うように求められているのではないのでしょうか。

その際、私たちは、きちんと心に留めていなければならない事があります。キレネ人シモンは、自分から進んで十字架を主に代わって負ったわけではないと言う事です。彼は強いられたのです。思いもかけず、たまたま居合わせたばかりに。恐らくローマ兵に首根っこをつかまれ、「お前がこの十字架を負うんだ。このイエスはへたばってしまってどうにもならない。」と無理強いされただけです。主イエスを愛したからでも、十字架の意味が分かっていたからではありません。犠牲的精神や同情心が豊であったからでもありません。強制されたから。やむを得ずにした。

そして、それはシモンだけではない、私たちも同じです。「今度同じことがあったとしたら、その時は、自分の意志で主の十字架を負う」と言い切れる人がいるのでしょうか。十字架は、ネックレスやペンダントではない、飾りではない。主の十字架を担う事はあまりにも厳しい。恐ろしい事です。神の怒りの審きを受けて滅びることなのですから。やはり私たちは十字架を強いられて担う者です。その事をこの聖書テキストは私たちに教えてくれています。

ですが、いったい誰が強いたのでしょうか。キレネ人シモンの場合はローマ兵でした。が、私たちの場合は違います。主イエス・キリストです。主が私たちに求められたからこそ、私たちは、主と共に行く事ができるのです。そのしるしとして私たちは、主の十字架のもとに集められ、今礼拝を献げています。しかも、主イエスはローマ兵のように力づくで、十字架を担う事を押し付けるではありません。ローマ兵は自分では十字架を負いません。ですが、この礼拝では、ご自身で十字架を負われる主が中心におられ、私たちに語り掛けられる。主イエスは、「自分の十字架をあなたも担いなさい」と私達に求めておられます。

### 3 女たち

さて、シモンについての叙述は、26節だけで簡潔なものです。しかし、それに続く27節以下の、女たちに対する主イエスの言葉は比較的長いもので、

内容も難しい。27節、28節にこうあります。「民衆と嘆き悲しむ婦人たちが大きな群れを成して、イエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。『エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣け。』」28節以下の主イエスの言葉は、大勢の群衆ではなく、嘆き悲しむ女たちに向けられたものである事は明らかです。女たちは「嘆き悲しんでいた」、原文を読むと、声をあげて嘆き悲しんでいたようです。

「この女たちは、いわゆる〈泣き女〉だ」と考える人々もいます。何か悲しいことがあると、おいおい、わあわあ嘆き悲しんで見せて商売をする泣き女たちが、当時のユダヤにはいたようです。弔いが出た家について涙を流し、報酬を得た。そういう泣き女たちの類がここにいたのではないかと考える人々もいます。勿論、反対の人もいます。泣き女ではなくて、ガリラヤから主イエスがエルサレムに来られるまで、ずっと一緒に旅をしてきた女たち、主イエスを愛していた女たち、彼女達がここで嘆き悲しんでいる、というのです。

ですが、ルカは、この女たちがどういう者であったかを語っていません。まるで、ルカは「女たちが何者かが重要なのではなくて、ここでもっと注目すべき事は、女たちの嘆きを聴いた時、主が口を開かれたという事なのだ」と考えて、福音書を編集したかのようです。

主イエスはこれまで長い間、沈黙を守り続けておられました。誰が何をしようが、何を叫ぼうが、主イエスはじっと黙っておられた。そこには、神の怒りの杯、私たち人間に向けられるべき怒りの杯を、静かで深い沈黙のうちに受け入れておられる姿がありました。その主イエスが遂にここで口を開かれた。だから、そのみ言葉は重要なのです。そして、この言葉が主イエスの地上のご生涯において、最後に与えられた我々人間への教えでした。まさしく、今、現実には十字架の道を歩いておられる主イエスが、私たちがそれぞれの十字架を負うと言う事がどういう事かを教えてくださっているのです。

さて、ここで、主イエスは、「泣け」と言われます。既に泣いている女たちに向かって泣けといわれました。おかしいことです。ですから、つまり、主は、ここで、「正しく泣け、お前たちの泣き方は間違っている、お前たちは間違った事の為に泣いている」と仰っているのだと思います。十字架の道が悲しみの道である事は明らかです。ですが、十字架の道が悲しみの道であるならば、いったい、何を悲しむのか、が問われているのです。私たちは、今、改めて自らに問い直さねばなりません。それが主イエスが望まれる事です。主は仰る。「あなたがたは私の為に泣いているのか、自分のために泣くがよい。」つまり、主イエスはここで同情を求めてはおられるのではない。そうではなくて、悔い改めの涙を求めておられるということです。主イエスご自身、今ここで、苦しみの中にある、しかし主イエスが「十字架を負って私たちについてきな

い」と言われた時、主は「このわたしの苦しみをあなた方は一体どれだけ共に苦しんでいるか？」等と問うてはおられません。「お前たちに私の苦しみが分かるものか」と言われたのでもありません。主の御苦しみに同情する事が、主の十字架の道にふさわしい事ではありません。主の十字架の道行を前にして流す涙、その涙は、主に向かって「おいたわしい事です」と言って流す涙ではない。そうではなく、「何故、主イエスがこの道を歩まれるのか、この私の為ではないのか、この私たちの為だ」、その事に気づいて、自分の罪の深さを真実に嘆く涙が、今、ここで求められている事なのです。

主イエスがここで女たちに語っておられる事は、とても厳しいことです。旧約聖書の言葉を用いて主は語っておられます。例えば、29節は、哀歌第二章の内容です。神の民が罪に打ち砕かれる姿、ひいては、全人類がその罪によって自らに滅びを招き寄せる様子を嘆く姿です。私たちの姿さえもそこに重なってきます。とても厳しい現実です。

そして30節に引用されているのは、ホセア書第10章8節の言葉です。預言者ホセアは、徹底的に人の罪を赦す神の愛について語った預言者です。しかし、彼はまた厳しく罪を罪として語っている預言者でもあります。うんざりする程に罪について語り、神の審きについて語ります。「イスラエルは伸び放題の葡萄の木、実もそれに等しい。実を結ぶにつれて、祭壇を増し、国が豊かになるにつれて、聖なる柱を飾り立てた。」というホセア書第10章の一節を読んだだけでも、神の嘆きが聞こえてきます。経済的に豊かになったイスラエル。しかし、豊かになればなるだけ、神から離れていく、そして偶像礼拝が豊かになるだけ。私はこのコロナ禍で顕わになった日本の衰えた姿を見ていると、もう少し前に、神のこの審きの言葉に私たちが真実に従っていれば…と思わずにはいられません、それは日本だけではないでしょう。今を生きる私達が聞かねばならない言葉がホセア書では語られています。そしてホセアは言います。必ず神の審きが来る、そしてその審きが起こった時に、何が起こるか。ホセア書第10章8節にはこう記されています。「そのとき、彼らは山に向かい、『我々を覆い隠せ』／丘に向かっては、『我々の上に崩れ落ちよ』と叫ぶ。」とても厳しく辛い経験を重ねている時に、山を仰ぐ、丘を眺める、そこには昔ながらの緑の木が茂っている。何故自然は変わらないのか、自然は平和であり続けるのか？どうして私ひとりがこんなに苦しまなくてはならないのか。

そう思いつつ、山よ、丘よ、わたしを覆ってくれ、さもなければ、わたしはこの神の審きに耐えられないと叫ぶ声都在这里詠われています。預言者ホセアはそのような神の審きにさらされている自分の民のために涙を流した人、泣いた人です。イスラエルの罪を象徴するかのような妻の不貞に苦しめられつつ、

愛し続けた人。悲しみの預言者とも言われています。主イエスは、ここでそのホセアの言葉を引用されます。「生木」とか「枯れ木」の言葉で何を意味しているのか、解釈が様々にあります。しかし、どのような解釈であろうとも、私どもは誰ひとり、自分が生木のような強さを持っているなどとは思えないという事です。枯れ木のもろさを持っているのは、誰であろう、この自分であるという事を認めざるを得ません。誰が神の審きに耐ええるでしょうか。

ですが、主イエスはここで審きの厳しさを改めて語っておられるではありません。それは、先ほど申しましたが、ここで私たちが自分の罪を知り悲しみ、悔い改めることを求めておられるのです。ありのままの自分を見なさい、自分の悲しい姿を見なさい。その姿を嘆き悲しむ、叫びをあげなさい。憎む自分、妬む自分、審く自分、高ぶる自分、偽る自分。しかも、私たちはこの自分を自分でどうする事もできない、愛に生きえない自分をどう始末する事もできないのです。だからこそ、主イエスは、ここで「泣きなさい」と言われます。本当の自分の姿を見て泣き嘆きなさい、と。それはどうしようもない自分に気づけという事だけにとどまりません。主イエスのみ前で「泣きなさい」と言われる。私が、自分ではどうしようもないあなたの罪を肩代わりして十字架につき苦しみ、死のうとしている。だからこそ、あなたは本当の姿に気づくがよい、古い姿ではない、私の御前にいる本当の姿に気づくがよい、主はそう仰っているのではないかと思います。

それはあなたは既に救われている姿だ。救われている自分に気づくがよい、と主イエスが言われるのです。私たちが、主の十字架の道行を共にしながら知るのは、自分の罪を悔いる涙。その涙は、主の前の自分を知る涙でもあります。自分の罪を知ると同時に、赦されている事も知る涙、解き放たれた者の涙でもあります。解き放たれているからこそ、十字架を担いゆく主のもとに立ち帰り、自分の十字架を担って主に従いゆく者の喜びの涙です。私たちは、主のもとで十字架を担える者とされている、それが私達の真実の姿です。私達の重い罪の報いの十字架は、既に主に担われ、主イエスの十字架で帳消しにされているからです。

だから、ここで泣いて流す涙は、悔い改めと感謝の涙となります。教会とは、主の道行を共にする涙を学ぶ場所だと言った人がいます。その通りだと思います。そういう涙を流して、私たちは主の十字架の歩みを共にする道を生きる者となり続けます、変わり続けるのです。

#### 4 聖餐式

そうやって、私たちは、自分の為だけでなく、人の為に悲しむ者、神と隣人

の為に働く者と変えられていくのです。それが主の十字架の道行を共に行く者。今日は、八月の第一日曜でありますから、聖餐を持ちます。聖餐について忘れえない話があります。高齢の引退牧師がしてくださったマザーテレサについての話です。皆さんもよくご存じのマザーテレサ。全てを貧しい人々にささげ尽くしたマザー。彼女を支えていたものは一体何なのか？その牧師が不思議に思っていたちょうどその時、マザーテレサの活動を伝えるドキュメンタリー映画が教会で上映されました。毎朝四時、まだ暗いうちに、聖体拝領のおミサが執り行われる。マザーテレサは、他の沢山のシスター達にまぎって壁際に立って、聖体拝領の順番を待っていたそうです。聖体拝領とはカトリックの言葉で、プロテスタントでは、聖餐と言います。やり方も横浜ナザレン教会のように皆さんの所に配るようなやり方ではありません。一人一人順番に司祭の前に出て行き、ホスティアというウェハースのようなものを舌の上に載せてもらい、そのまま自分の席に戻る。マザーテレサも自分の番になると前に出て、聖体を受けると、また壁際に戻る。もぐもぐと動く口元、今、頂いた主のお体を味わうように、合わせた手を口元に持って来てゆっくりと味わっていた。それは、まるで口元に手を合わせて祈っているようだったそうです。引退牧師は、マザーテレサのその姿を見て、彼女の大きな働きを支えているのは、人間的な寛大な心でも愛情深い性格でもない、ただ十字架の主イエスキリストだけなのだ、だからこそ彼女はあれだけの事を淡々となしていきけるのだなあ、と思い知ったそうです。

マザーテレサも歩んだ主イエスの十字架の道、私達も共にいきたいと心から願います。